天地　ネットワークテーブル　５４１ 号

天地シニアネットワーク　２０２３．３．１６

TENTI・TODAY 「一日一回は牛乳を飲みましょう」			1
会員の広場（受信メール）「神宮外苑再開発」「ラジオを楽しむ」			2
随　筆	「日々をいとおしみて」より 「かえりみて」	宮川典子	4
歴　史	リトアニアで1万人のユダヤ難民に日本通過ビザ発給、彼らを窮地から救済した日本の外交官、杉原千畝とはどんな人だったのか（４）	佐川雄一	5
評　論	安倍晋三回顧録（中央公論新社）を読んで（１）	臺　一郎	9
歴　史	「了解日本（日本を知る）」 （８）戦国時代が江戸時代を作った	兪彭年	10
回　顧	有楽町慕情（５）	津田孚人	１２
事務局			１４

****

ＴＥＮＴＩ　ＴＯＤＡＹ

****

桜のシーズンを迎え、春を満喫したいところですが、花粉公害もありブレーキがかかります。ＷＢＣでの日本チームの快進撃は、ブレーキ無しで続きそう、楽しみ大です。

****

「一日一回は牛乳を」

エネルギーコスト、飼料代の高騰などで国内酪農家が非常に苦しくなり、絞った牛乳を捨てているという大変ショッキングな映像が流れていました。牛乳の消費量が落ち、酪農家は牛乳をもっと飲んでください、と悲痛な叫びをあげています。政権与党は、低所得家庭に一時金を支給するのに熱心ですが、「一日一杯の牛乳を」とキャンペーンをする方が先です。

****

当ネットワークのスタートは２０００年３月、この３月で満２３歳を迎えました。メルマガもメール版が５４１号、印刷版が２４１号と、ビックリする回数になりました。事務局は編集し、配信、配送するだけ、時々は中国旅行、講演会など企画提供しましたが、殆どは、シニアの方々の思いや体験を自由に発表できる場所を提供することに徹してきました。長く続いたのも、たくさんの方々の信用、賛同、支援があったお陰と感謝しています。

そして事務局の小作暁介、小俣光夫、天国に召された親しき多くの方達と今日の日を共に迎えることが出来ず、残念です。

****

振り返ると、危機の時が幾つかありましたが、最大の危機は東日本大震災の時でした。当時、事務所はＪＲ秋葉原駅近くの古くて小さなワンルームしかない個人ビルの最上階で7階。地震発生時、小俣と二人、激しい揺れに立っていられず廊下に出て側壁にしがみついていました。壁が崩れ落ちたら駄目の思いがフット頭を過ぎりまし

たが幸い、ビルは崩れず助かりました。危機一髪という所でした。
****
阪神淡路大震災（１９９５年１月１７日）も運よく無事でした。当時、神戸の（株）ノーリツに出向していました。長く神戸に住む予定でしたが、東京での営業を希望して会長に直訴、地震の前に東京勤務になりました。地震発生が午前６時前、旧居留地にあった本社は壊滅状態になりました。役員会も営業会議もいつも神戸本社。もし、地震発生が午前９時頃だったらアウトだったでしょう。
****
北林文夫さんの「我が町秦野の歴史と現在」は、前回をもって終了となりました。
****
「ひやくてん、まんてん（百点満点）」と大きな声が響いた。ここは斎場。棺の中が生花で埋め尽くされ、いよいよ最後に家族のみでお別れをする、その時だった。泣きながら思い思いの言葉をかけている中でひときわ大きな女性の声がした。・・昨年１１月、娘の義父が８３歳で急死した。直前まで仕事をし、ゴルフの予定まで入っていたという。突然、高熱が出て入院したが治療のかいなく永眠した。後で、声の主は誰かと娘に聞いたところ、義父の娘さんだったとのこと。」
朝日新聞　３月８日・朝刊　「ひととき」にでていた鹿児島市の主婦（７２歳）の投稿文の一部です。読んで、動揺しています。
****

会　員　の　広　場

****
受信メールから
****
北川新十郎さん（８０歳）が、毎日新聞朝刊・３月５日文化欄の「文化の森」に親友の子息、斎藤幸平東京大学准教授の文章が載っていると新聞コピーをメールで送ってくれました。斎藤准教授は、行き詰った資本主義を鋭く批判するマル経学者。最近非常に注目されていますのでご存知の方も多いかと思います。新聞記事を入力しました。（天地）

「神宮外苑の再開発」
　「人新世の資本論」を刊行してから「開発」をめぐって、全国からいろいろな連絡や相談が来る。明治神宮外苑地区の再開発、新宿御苑の除染土計画、大阪市の街路樹伐採、千葉の里山のメガソーラー・・・。ネットで情報を拡散したり、勉強会で話をしたりすることは簡単に出来るが、それで十分か。当事者たちの深刻な訴えを前に自分に何ができるか自問する。
　毎日新聞での連載「斎藤幸平の分岐点ニッポン」（２０２２年３月終了）で、都営霞ヶ丘アパートに住んでいた菊池浩一さんに話をうかがった時もそうだった。２０２１年に開催された東京五輪の際に建設された国立競技場のため、菊池さんたちが長年住んできた都営住宅が解体された。
　高齢の住民による反対の声はかき消され、新しい環境に馴染めないまま亡くなった方もいる。そのおかげもあって東京五輪はそれなりに盛り上がったのかもしれない。だが国立競技場はいまや、公費年２０億円の投入が必要な、五輪の負の遺産になっている。
　そんなことは当時から分かっていたのだ。より深刻な問題は、あまりにも乱暴な形

で、さらなる神宮外苑開発が続いていることである。都は２月１７日に再開発事業として認可した。計画によれば、神宮球場と秩父宮ラグビー場は解体される。高層の商業施設も開業予定だ。誰も利用できるスポーツ施設がなくなり、会員制テニスクラブしか残らない。

こうした大規模再開発に合わせて、既存の樹木が７４３本伐採されるというのはメディアでも取り上げられたが、それはほんの一部にすぎない。神宮外苑の再開発全体では、数千本の樹木が伐採されることになるという報道もある。

ビッグイベントに合わせた乱暴な開発を、アメリカの社会学者ジュールズ・ボイコフは、「祝賀資本主義」と呼び批判した。だが、もう東京五輪の祭りはとうの昔に終わっている。 贈賄による逮捕劇をみれば、祭りの高揚感は失せているのだ。そんななか、五輪を利用した資本主義の暴走をこれ以上許していいのか

樹木を伐採し、まだ使える競技場を破壊する。行き詰った現代資本主義は、もはや社会の富を破壊することによってしか利潤を生めなくなっている。その先にある過剰開発には経済的合理性は存在しない。そもそも、どこにでもあるような似通った商業施設を作るよりも、都心を緑で豊かにする方が、東京の魅力を世界に発信することになると私は思う。

都心の開発はこれまでも自然を破壊してきたのだから、今更自然保護を訴えるのは欺瞞と感じるかもしれない。だが、ニューヨークでは、０７年以降１００万本の街路樹を植え、さらに１００万本を植えようとしている。パリでも五輪に合わせ、凱旋門やコンコルド広場で緑化が進む。気候危機の時代にヒートアイランド現象を抑制するのが一つの狙いだ。つまり、世界の流れと逆行する形で東京だけが、わざわざ１００年かけて作ってきた森を破壊しようとしているのである。

神宮外苑だけではない。今回の公園指定を一部解除する特例を芝公園や青山公園にも適用するという話も出ているという。芝公園は、私も中高時代にサッカー部で毎日のように走り込みをした場所だ。

再開発はもはや他人ごとではない。公園のような社会の富としての「コモン」は利潤を生まない。資本の論理から「コモン」を守るには、市民が反対の声をあげるしかない。

だから私は、神宮外苑再開発の差し止めを要求する裁判の原告の一人になることを決意した。初めての経験で、どのような展開になるのかは想像もつかない。それでも、とにかく、もうこれ以上沈黙をしたくないのだ。

****

内山和良さん（８０歳）からのメール

眼に問題があり、もっぱらラジオで楽しんでいます。ご参考までに受信ラジオの現況を、以下に記しておきます。

１．ネット・ラジオの受信方法

インターネットを通してＰＣあるいはスマホでラジを安定した音質で受信できます。
ＮＨＫの第一、第二、ＦＭは、グーグルなどの検索エンジンにらじるらじるとキーワードを入力し、年策結果からアプリをダウンロードしていただければ受信できます。
民間放送などをらじことキーワードを入力してください。

２．カルチャー・ラジオ番組

ＮＨＫ第二で 20:30-21:00 に毎日放送、以下の内容です。
（再放送；翌週 10:00-10:30）
月曜　ラジオ・アーカイブ
昭和の著名人のインタビューと解説（保坂正康）
今週は、有吉佐和子でした。
火曜　歴史再発見がテーマ
現在（１月から３月）は古代中国の日常生活（講師は、早田大の先生）
水曜　芸術その魅力
現在は、日本の書と日本人の美意識
木曜　分ｇｓ久野世界がテーマ
現在は、弱さから読み解く勧告現代文学です。
金曜　　科学と人間がテーマ
現在は、宇宙の謎にせまる相対性理論と天文学との関係
土曜、日曜も番組がありますが、私は聴取していません。
なお、過去３か月分は、ストリーミング・サービスとしてＮＨＫのＨＰに直接アクセスして聴取することができます。
****
エッセイ集　　宮川典子（９４歳）　「日々をいとおしみて」（２０２２年１１月）より

かえりみて

昭和二十年八月一日、私は信州小諸に程近い中込町の工場宿舎で専門学校の入学式に臨んだ。米英との戦争は次第にひっ迫し，前年からは女学校でも授業がなく兵器生産に従事していた。しかしこちらの工場には、部品が全く入荷せず、毎日炎天下で草取りをした。夕食に出たお浸しをほうれん草と思って食べたらざらざらしている。地方出身の友人が、昼間取った雑草で「あかざ」というものだと教えてくれた。食事は至って粗末だった。

八月六日、広島に新型爆弾が投下された。物理の湯浅年子教授から説明を受けた。彼女はキュリー夫人の娘の門下生であった。「まだ発表がないけれど、多分この型だと思います」と黒板に複雑な分子式を書いて説明された。残念なことに女学校三年までしか勉強していない私たちは理解できない。ただ広島を一瞬で何もかも破壊してしまう恐ろしいものだということは頭に残った。九日には長崎にも落とされ、遂に八月十五日終戦となった。

「神国日本を守れ」「一億玉砕」等の標語は一体何だったのだろう。複雑な思いを抱きながら帰京、中込には僅か二，三週間の滞在であった。我が家は三月の下町大空襲で焼かれ、五個所に分散していた家族八人がやっと揃って暮らせるようになって嬉しかった。

九月の新学期になっても授業は始まらなかった。私の学校は教員養成が目的なので生徒は全国から集まっている。戦後東京は極端な食糧難で全校生を集めることが出来ず、学年ごとに二個月だけ授業が行われた。十二月になり初めての授業は柳田為正教授の生物学であった。一年半も遠ざかっていたので、ようやく学問に触れた喜びは今も忘れられない。

学業に関していえば私たちは不運であった。理解力、暗記力の一番強い時期を戦争のため費やしたから、学力の弱い人というレッテルは長くつきまとった。しかしそれだからこそ向上心を持ち続けられたのだろう。
卒業後のクラス会はいつも在学中の苦労話で持ち上がる。各自がしみじみと語る。
「私たちは色んな時代を見て来た。」
「同年代やもっと上の男性は、仕事や学問を続けたかっただろうに、戦場で命を落とした人が多くいた」
「焼け出されたり、食料不足だったりしても、皆が同じだったから惨めな思いはしなかった」
「少しずつ日本が復興していく姿を実感できて、いつも将来に希望を持てて幸せだった」
などである。

今、七十余年の過ぎし日を振り返ってみると、様々な経験を経て養われた力が自らを支えているのだと感じ、これからも一日一日を大切にして行こうと思う。
****

リトアニアで１万人のユダヤ難民に日本通過ビザを発給、
彼らを窮地から救済した日本の外交官；杉原千畝とはどんな人だったのか

佐川雄一（８６歳）

第４回
杉原千畝をコズモポリタンにした満州の生活環境

日露協会学校（ハルピン学院）卒業後、杉原は外務省にロシア語通訳官として採用される。入省 2 年後（この時点ではハルピン学院特修科在学）、白系ロシア人女性と知り合い、結婚する。杉原 24 歳、妻のクラアウディア・アポロノフ 16 歳であった、二人は相思相愛の仲であったと当時の同僚が語っている。杉原は日本でトップクラスのロシア語能力を蓄え、他者を寄せ付けないロシア通になろうと心がけていたので、白系ロシア人との結婚も彼の目的成就の一プロセスであったのかもしれない。
杉原は、ロシア人街にも、中国人街にも頻繁に出入りし多くの友人を創っていた。白系ロシア人；クラアウディアとの結婚後、杉原はロシア正教徒に改宗、ロシア名をセルゲイ・パブロビッチとした。
しかし、杉原は、クラアウディア・アポロノフからの申し入れで 12 年間続いた結婚生活に終止符を打ち、双方合意の下に離婚した。そしてその翌年、1936 年 4 月 7 日、再婚する。相手の名は菊池幸子（ゆきこ）、幸子は 23 歳、千畝より 13 歳年下であった。

杉原の妹；柳子（りゅうこ）は 1930 年代初頭、杉原とともにハルピンに住んでいたが、『クラウディアと離婚後も、資金的に面倒を見ていたし、最後はクラウディアのために住宅まで購入してあげた』と語っている。さらに、諜報活動を円滑に進める手段として大きな邸宅に住み、『兄は、二つの応接間に十卓の麻雀卓をつないで並べ、会場にしました。特務機関の代表や諜報部の将校をふくめ、50-60 人の軍人が、若い日本人官吏（杉原）と美しい白系ロシア人の妻（クラウディア）が主催する夜会に集まりました』。『二つの応接間と、婦人用の客間まであり、冷蔵庫が八畳間二つ分の広さがあった』

“千畝（In Search of Sugihara）” の著者；ヒレル・レビンは、杉原の妻；クラウディアと、彼女の死の直前（当時 93 歳）、シドニーの養老院で面談し、杉原との結婚生活について聴取している。二人は愛し合っていたが、杉原の将来を考え、クラウディアの方から離婚を提案したという。クラウディアは杉原について『彼はユダヤ人にも非ユダヤ人にも親切でした。彼のところへ来た人とは、誰とでも友達になりました。彼はロシア語が堪能で、教養もありました』と語っている。

それにしても、世界で最も均質的な日本社会で育った杉原が、日本の常識では想像できない型破りな行動（① 白系ロシア人も中国人も差別なく接する、② 困窮したユダヤ人難民の救済を決意、行動に移す）を起こすコズモポリタンに成長していったのか、杉原千畝は日本の現代史から眺めても注目に値する。

その鍵は、後藤新平が創立したハルピン学院で学び、現地の文化・慣習を学びながら現地の人たちとの交流を深め、現地で苦しんでいる人を見たら助ける、この行動規範を率先垂範したことであった。杉原がコズモポリタンになれたのは、彼が青年期、過ごした満州の環境に負うところ大であった。

1. リトアニアのカウナス領事館に赴任、ユダヤ難民に日本通過ビザを発給する杉原千畝

長期間の満州在勤後、今度はヨーロッパが杉原千畝の働く場所に、最初の勤務地はフィンランドのヘルシンキであった。1937 年 9 月、家族を帯同して、太平洋、アメリカ大陸横断、大西洋を経由、ソ連と国境に近接するヘルシンキに着任する。杉原に課せられた仕事は、ソ連軍とナチスドイツ軍の軍事動静を探ることであった。

杉原は満州で長く、諜報活動に携わっていたので新天地での業務にも容易に順応できた。フィンランドはソ連と長い国境線を持ち、領土を巡る問題にも直面していたので、対ソ連諜報活動には最適地であった。早速、数名の外国人スパイを雇い、直ちに行動を開始した。当時、公使；酒匂秀一（さこうしゅういち）は妻を日本に残す単身赴任であったので杉原夫人（幸子）が公使夫人の代理としていろいろな催しに駆り出された。

2 年後の 1939 年 8 月、リトアニアのカウナスに領事館設置が決まると、杉原は、同月、領事代理としてヘルシンキからカウナスに転勤する。杉原は、新たな任地について『カウナスなどに、何のために領事館が必要なのか？もともとリトアニアには一人の日本人在留民とておらず、直接の貿易、取引関係のごときも絶無なのに』と不満を漏らした。しかし、この裏には、陸軍参謀本部が外務省に対し、短期間であってもリトアニアに領事館を開設して、ドイツ軍の行動を把握できる体制つくりを強く求めた背景があった。その結果、杉原がヘルシンキからカウナスに移動することになったのである。

このころ、ヒトラーは、日本とイタリアに対する軍事情報の秘密厳守を配下の高官に厳命していたので、ソ連とドイツの軍事情報の収集は困難を極め、モスクワ、ベルリンに限らず、周辺国での情報収集が大変重要になっていた。

他方、リトアニアのカウナスに着任した杉原は、新たに採用したポーランド人諜報部員のインプットで、ポーランド在住ユダヤ人の安全・生存がいかに深刻な状況にあるか理解を深めていく。こんな事情があって、杉原は、本人に課せられていたナチス

ドイツ軍、ソ連軍の動静を探る諜報活動の他に、ユダヤ人が置かれた窮状について強い関心を持ち始める。

他方、カウナス領事館の運命は急展開する。1939 年 8 月、開設された領事館は、僅か 1 年後の 1940 年 8 月閉鎖することになった。その 2 ヵ月前に、バルト 3 国を併合したソ連政府は領事館の閉鎖を要求してきたのである。杉原は、同年 8 月末、領事館を閉鎖し、9 月 4 日、家族とともにベルリンに向かうことになる。かくして、杉原のカウナス滞在は 1 年と短かったが、ポーランド在住ユダヤ人に目を向けると、別の現実が浮かび上がってくる。

ドイツ軍とソ連軍に分割占領されたポーランドのユダヤ人は、生命の安全を探る活動を自分たちのネットワークを駆使して確認し合っていたが、ポーランドで生きながらえる難しさを実感し始めていた。こんな絶望状態のなかで一縷の光が差してきた。隣国のリトアニアで日本通過ビザを得て日本へ向かい、日本からアメリカ・カナダ・パレスティナ、等へ逃亡する案が浮かび上がってきた。そのため、多くのユダヤ人が日本通過査証を求め、カウナスの日本領事館前に集まり始めた。言語に絶する困難を乗り越えてポーランドから国境を越え、リトアニアに逃れてきたユダヤ人難民の苦しみを、ポーランド人諜報部員から聴取していた杉原は、諜報活動とは別に人道上の任務が新たに現れてきたと実感する。

こんな状況のなかで、1940 年 7 月 18 日早朝、数百人ものユダヤ人が領事館の前で列をなしている姿を見て杉原はびっくりする。杉原は、その中から 5 人の代表を呼んで、話を聞くことにした。選ばれた 5 人が領事館に入って来た。代表格のヴァルハフティグ（のちのイスラエル宗教大臣）が話を始めた。「われわれはポーランドから逃げてきたユダヤ人で、日本領事館へ行けばビザがもらえると聞いて来ました。我々が望むものは、日本通過の許可であって、日本に長期間とどまるためではありません」と懇請した。

杉原は、苦悶の末、外で待つ全員にビザの発給を真剣に検討することにした。その結果、杉原は、日本の外務省にあてて、複数回、日本通過ビザの発給許可を電報で要請するが、回答はいつも同じ、最終目的地の入国許可が確認されていない

限り、日本通過ビザの発給は許可できない、であった。

ビザを求めて日本領事館の前に　並ぶユダヤ難民（１９４０年）

ここで、リトアニアのカウナス領事館勤務時、杉原千畝は、なぜ！大量のユダヤ人に日本通過査証を発給したのか、振り返って見たい。杉原は、危機に直面した時、単独で行動を起こす勇気とそれを支えるに足る知識・経験を蓄積していたので、決して思いつきで事を起こすことはなかった。杉原はユダヤ人の生命が危険な状態にあることは重々理解していたし、自分にどんなことができるか、そしてそれによって自分と家族がどんな危険に直面するかを考えながら最後の決断を模索していた。情報収集は徹底して行った。

①杉原の下で諜報活動に専念していたポーランドの地下抵抗組織からポーランド在住のユダヤ人が置かれた状況について詳しく聴取していたので、彼らを救済するために何ができるか、杉原は決断を迫られていた　外務省からの訓電にも配慮し、本省の通達に従うか、それとも人間の良心に従うべきか、悩んだ

② 杉原はリトアニアのソ連総領事館に出向き、ユダヤ難民のソ連通過についてのソ連側方針を問い合わせると、『日本通過ビザさえ確認できれば、ソ連政府はソ連通過ビザを発給できます』と答えが返ってきた　ただ、杉原はソ連の領事館が、いくら「明言」したところで、それが保証になるとは考えなかった

③ オランダ領南米のキュラソー・スリナムを難民受け入れの最終目的地とするアイデアは在カウナス　オランダ総領事の入れ知恵であったが、オランダ政府も暗黙裡に認めたことを確認し、これで形式的には難民の最終目的地がクリアーになったと考えた

日本通過ビザを有効にする最低条件は、杉原が現地の在外公館・領事館・関係者に事前コンタクトしてクリアーできたが、それだけで難民が目的地まで無事に辿り着ける保証にはならない。先行き不透明感のある中で、決断を迫られれば、選ぶべき道は二つしかなかった。ひとつは日本政府の最終回答（最終目的地が明確でない限り日本通過ビザは発給しない）を頑なに守る、もうひとつは、難民の置かれた立場に配慮し、人道と博愛の精神を持って、最後は自己責任で判断する、杉原は後者の道を選んだ。

松岡洋右外務大臣から杉原千畝宛に 1941 年 2 月 4 日『カウナス駐在時、どのくらいの日本通過ビザをユダヤ人に発給したのか』問い合わせがあった。翌日、杉原は『2,132 件のビザを発給、この内、約 1,500 件がユダヤ人であった』と回答している。但し、領事館の閉鎖が決定しているなかで、ビザの発給件数が日ごとに急増していくとなると、日本通過ビザの発給者リストを領事館の記録に詳細に残す時間的余裕はなかった。そのため、杉原はビザ関連の記録を残す作業を途中で断念していたので、最終的にどのくらいのビザが発給されたか確認できる資料は残っていない。

因みに、杉原がリトアニアで日本通過ビザを発給したユダヤ人の多くはポーランド又はリトアニア系のユダヤ人であった。

杉原は、リトアニア　カウナスの次に赴任したプラハの総領事館でもユダヤ人難民に多数の日本通過ビザを発給している。そんな杉原の行動を憂慮したのか、ドイツ政府はプラハの日本総領事館前にドイツ語とチェコ語で“ユダヤ人入るべからず”の警告板が貼られた。（左上　写真参照）

当時、ポーランドに住んでいたユダヤ人は、約３50 万人、その内、約 300 万人が域内隔離（ゲットー）か強制収容所で犠牲になったといわれる。一方、隣国、リトアニアに逃避した難民の内、6,000 人～10,000 人が杉原ビザで救われたとされる。

これはドイツ軍がリトアニアを占領する前の出来事であるが、杉原がカウナスを離れ、ベルリンに出発して 10 ヵ月後、ドイツ軍は独ソ不可侵条約を破棄してソ連軍が駐留するリトアニアに侵略、ドイツの占領下になった。リトアニアに留まっていたユダヤ人の多くは、ゲットーに隔離されるか強制収容所に連行され命を落とした。この事実に照らすと、杉原の人道的な決断による日本通過ビザの発給が、当時、カウナス在留のユダヤ人にどれほど大きなインパクトを与えたか、理解できる。正に、杉原はユダヤ人の救世主になったのである。

****

「安倍晋三回顧録」（中央公論新社）を読んでーその１ー　　臺　一郎（７５歳）

令和４年７月８日、安倍晋三元総理が銃殺された。それからわずか7ヶ月後の令和５年 2 月中旬、全国の本屋の店頭に「安倍晋三回顧録」が並んだ。安倍氏が亡くなってから未だ一年も経たないうちの出版であった。過去の総理回顧録では例を見ないほどの早さだ。

安倍氏が総理の時代に、内政や外交などに関して激しい討論をしたり、きわどい交渉をしたり、水面下での綱引きなどに関わった内外の政治家、高級官僚、経済人などがまだ現役乃至は存命のうちに、討論や交渉の裏話などを回顧録という形で公表するようなことは、日本に限らず海外でもあまりないだろう。

普通は 10 年とか、20 年といった時間を経て、回顧録で紹介されるエピソードが歴史化する、或いは関係者の多くが故人となった頃に出版されるのではないだろうか。にもかかわらず、このたび安倍元総理の回顧録が出版された背景には、昨年中に既に原稿が完成していたこと、及び、昨年 7 月に安倍氏が暗殺されて急逝したために出版の判断が未亡人の昭恵夫人に託され、彼女が OK したことなどによる。

生前の安倍氏は、関係者の多くが生き残っている上に、内容があまりに機微に触れるとして一度は刊行を見送ったと言われる。でも読者にとっては、安倍氏が総理在任中に感じた喜びや感動、悔しさや憤り、或いは氏が接触した内外の政治リーダーや首脳らの知られざる人物像などが、イキイキと或いは生々しく紹介されていて中々に興味深い。とは言え、本の中で批判されるとか、普通なら表に出ない人間像などが暴露されてしまった内外の政治家や官僚などの中には不満に感じている人がいるかもしれない。

さて当回顧録の形式は、2020 年 10 月から 2021 年 10 月までの間に大手新聞社の記者 OB と現役論説委員の二名が合計 18 回に渡り安倍元総理にインタビューを行い、それに対する安倍氏の回答や関連データ等を編集・監修してまとめるというスタイルである。なお安倍氏の総理在任中に秘書官や内閣特別顧問等を務めた官僚 OB が監修者として関わっている。

本の体裁は A5版で総ページ数が 470 ページ、うち本文は 396 ページ、巻末の資

料が 73 ページほどある。ちなみに資料は安倍内閣の支持率や任期中に行った衆参両選挙のデータ、安倍氏が総理在任中の主要な演説原稿、友人や政界関係者による惜別の辞の原稿などから構成されている。
470 ページというページ数は硬い表紙を含めると3センチほどの厚みになる。通勤の電車やバスの中で読むには大きさ的にも重さ的にも適さないが、出版以来わずか数ヶ月で 20 万部を超す販売実績を残したというから驚きだ。政治家としての故安倍晋三氏の人気の高さをうかがわせる。

さて内容的には、安倍氏が第一次安倍内閣の総理に就任した 2006 年 9 月から大腸潰瘍により辞職した 2007 年 9 月までと、2012 年 12 月から 2020 年 9 月までの第二次安倍内閣の間のエピソードやトピックスが時系列的に紹介されている。
但し冒頭の第一章のみは、2020 年 2 月のダイヤモンドプリンセス号騒動から始まったコロナ感染症拡大への対応と、安倍氏の持病の再発による辞任決断までの経緯等が書かれている。
難しい経済政策や外交政策などの専門的な政策の解説といった内容は殆どなく、財務省を初めとする役人の抵抗や腹背や圧力に対する安倍氏の不満や憤り、各国首脳の人物像紹介や外交交渉における駆け引き等のトピックスなどが多く含まれている。よって僕のような平凡な一般人でも、理解のために引っかかることは少なくスムーズに読めてしまう。
特にトランプ米国大統領を初めとする主要国首脳の人物評や人物像の紹介などは、新聞やテレビではあまり語られることのない一面が書かれていて面白い。トランプ大統領は国務省や国防省など自国政府の官僚達の意見、要望、助言等をしばしば無視し聞き入れない。そのために、トランプがまともに耳を傾ける安倍元総理に対して、米国政府の官僚達がトランプへの説得や助言等を期待したというエピソードなども、老人キラー安倍晋三氏の面目躍如で面白い。

この本は小説や論文ではないので、最初から順を追って読み進まずとも、目次や本文中の見出しをざっと眺めて、ここは面白そうだなと感じたところだけを飛ばし読みすることが出来る点も良い。もっとも実際に読み始めると、面白くて結局は全部読んでしまう読者が多いのではなかろうか。自分もそうであった。
というような次第で、以下は次回に続ける。次回は本の具体的な内容や文章の部分的な紹介、自分が何故この本を読もうと思ったかの理由なども書いてみたい。
****

「了解日本」(「日本を知る」（第 8 回）　　俞彭年 （86歳）

「江戸文化の中の明と清の文化」

「戦国時代が江戸時代を作った」
中国の戦国時代（紀元前 475 年～紀元前 221 年）には、魏・趙・韓・斉・秦・楚・燕の 7 大雄国が覇権を競いあった。日本も群雄争覇の時代があり、歴史的には西暦 1467 年から 1563 年までの約 100 年間は戦国時代で、日本史ではこの間を戦国時代とする（この時代中国では明の統治期にある）。
室町幕府末期になってその支配力が弱まると、「戦国大名」（「大名」とは領主のこと）が各地に台頭し、その数は百を超え、戦乱が絶えなくなった。 ″戦国大名″同士の戦争 に加え、″一向一揆 ″（一向宗徒の暴動）が発生した。 一向宗は、日本

仏教・浄土真宗で、その平等思想は農民の間で広く受け入れられた。 農民を中心に、武士や商人などが、自己の信仰維持と利益を守るために、封建領主と戦った武力闘争であった。

このように、日本の戦国時代は、名実相伴う戦いが止まることがない戦国大名同士の戦いと、一向宗徒と封建領主との戦いが繰り広げられた時代であった。

尾張地方の織田氏、三河地方の松平氏（後の徳川氏）、甲斐地方の武田氏、安芸地方の毛利氏、薩摩地方の島津氏、駿河地方の今川氏、越後地方の長尾氏（後の上杉氏）など、戦国大名は覇権を争い、その結果、織田信長は戦国大名を制圧し、国土の大半を統一して戦国時代を終わらせたのである。

しかし、１５８２年、織田信長は京都の本能寺で家臣の明智光秀に襲われ、自害した。織田信長の家臣であった羽柴秀吉は軍を率いて明智光秀を滅ぼし、さらに織田信長の後継者となって四国、北国、九州、関東、奥羽を平定、日本全国を統一した。１５８６年、羽柴秀吉は大坂城を築き（明治維新後に”坂”を”阪”に改変）、以後大阪を本拠地とした。

１５８５年に羽柴秀吉は関白に就任した。（関白は中国の『漢書・霍光伝』の中にある、「全ての事柄は先に関白に報告し、関白から天皇に上奏する」から由来し、日本の古代官名。天皇を補佐して政務を司り、令外官で、大政大臣より上の地位にあった。）実際は皇帝を差し置いて皇帝の名前で諸侯に命令を下していた。

翌年、天皇から豊臣姓を賜り、豊臣秀吉と改名し、「太政大臣」（日本の古代法制における最高官職）となった。１５９１年、豊臣秀吉は関白の座を養子の豊臣秀次に譲り、自分は「太閤」（関白を子に譲った人のこと）になり、１５９２年と１５９７年、の両年に朝鮮へ出兵、その後、中国大陸を征服しようとしたが、いずれも失敗し、出陣の途中病死した。

武将・徳川家康は、豊臣氏亡き後の統治者になるため豊臣氏一派に挑戦、１６００年関ヶ原の戦いに勝利して統治者の地位を手にし、１６０３年、徳川家康は征夷大将軍（武家政治の首長的存在）に任ぜられ、江戸幕府を開き、日本の歴史は、江戸時代に突入した。１６１４年と１６１５年、徳川家康は豊臣家の本拠地である大坂城を攻め、豊臣秀頼と淀君（豊臣秀吉の寵妃で豊臣秀頼の生母）は自尽した。

中国では秦の皇帝が全国を統一し、秦帝国を建国したことで幕を閉じた。一方、織田信長は日本の戦国時代を終わらせたものの、全国統一的な政権を確立できず、部下の豊臣秀吉が確立した。 秦帝国はわずか１５年、２代で滅亡し、その後、前漢が２３１年続いた。 豊臣政権はわずか１７年、２代で滅び、その後江戸幕府が２６５年続いた。

徳川家康が開いた幕府は江戸（現在の東京、明治維新後に江戸を東京と改称）にあったので、江戸幕府（徳川幕府ともいう）と呼ばれるようになった。幕府は、対内的には、藩を抑制、権力は幕府に集中、外国からの影響を制限するために天主教の伝道、日本人の天主教信仰を禁止した。さらに、鎖国政策をとり、日本人の海外への出国を禁止した。全国の港の中で長崎港のみ開放、長崎交易のための中国船の入港が許された。

１８世紀には資本主義の芽生えと封建体制の弱体化が出現、19 世紀には欧米列強が幕府に相次いで通商条約を結ばせ、在日特権を得るようになった。幕府の支配は次第に揺らぎ、幕末には各地で「尊王攘夷」の動きが起こり、１８６８年の明

治維新を経て、２６５年間続いた江戸幕府と幕藩体制に終止符が打たれた。 そして、日本は大日本帝国の時代に突入する。

****

有楽町　慕情　（５）　　津田孚人（８５歳）

　昭和２７年７月７日、七夕の日に返還された第一生命館は、８月中旬までに一応の手入れを終わり、９月１日から営業を開始することにした。それに先立ち、８月２２，２３日と、契約者や各界名士たちを招き、館内観覧の機会を提供した。すると、この歴史的な“家”を一目見たいという希望者が現れ、日毎に増えて東京名物となってしまった。希望者が全国的となったので会社は、急遽案内係を設け、案内コースをいくつか作るなどの対応をする。すべての来館者が「マッカーサー元帥の部屋」を見たがった。参観ラッシュは半年ほど続き、少しずつ下火になって行ったが、来館者の中には米国のGIたちも多くいた。

　昭和３０年代の後半には、参観者を見掛けることは殆どなくなっていたが、「ＧＨＱのあった」建物ということは、世間一般の人の記憶の中に残っていた。社内でも、多くの部屋の壁が、腰の高さのあたりで横一線に剥げ、白くむき出しになったままの状態を見ると、机の上に足を投げ出しながら仕事をする進駐軍兵士がつけたもの、それは進駐軍に接収されていたからと、即、頭は理解した。

　ビルの中に、銀行、郵便局、診療所、理髪店があるのも驚きだった。用事は殆ど館内で済ませることが出来たが、これも進駐軍の置き土産だったに違いない。特に理髪店は本格的で、社員専用でいつでも利用できた。広いスペースのトイレ、エレベータ―階の全身を映し出す大鏡など、その他にＧＨＱ使用時の名残と思われるものがいくつかあった。

さて、矢野一郎社長は、接収解除後を以下のように予想していた。

　「敗戦の結果接収されたということは不幸なことであったが、一面においてはそのために『第一ビル』の名は世界の隅々まで広まり、日本に第一生命ありということを知らせてくれた。」「海外では専ら「第一ビル」と呼ばれたのに対し、国内では「ＧＨＱ」という呼び名が一般の常用語となり、第一生命館というよりはＧＨＱの方が名前の通りがよくなった。」

　「時の流れは休みなくすべての物事を変えてゆく。第一ビルの名も昨今、海外では忘れられ、ＧＨＱといってもわかる人は次第に減り、やがて誰も知らない時がくることは必定である。」

　「しかし、そんな時がきても、「マッカーサーの部屋」という言葉だけは、いつまでも若い人達の興味を引くかもしれない」

　そこで「ＧＨＱのビル」から「第一生命のビル」を取り戻すために、昭和３３年、ビルの側壁に「第一生命」の社名を掲げることにした。南側と北側の上部隅に縦に「第一生命」の四文字を金文字で取り付けた。文字は、出来るだけ格調の高いものにしたいと考え、当時一流の名筆柳田泰雲に依頼、金物の鋳物にするについては当代随一と言われた金工家香取正彦の指導のもと、富山県高岡市の老子製作所で鋳造され、昭和３４年５月に取り付けられた。１字が２５０ｋｇ以上もある大物、これを垂直な壁面にとりつけても金輪際落ちることがないようにするため、厚い壁石を貫通して中の鉄骨にしっかりと固定した。

次の企画が「第一生命ホール」の設立だった。戦後にはまだどこにも「貸ホール」がなかった。そこで思い切って6階の集会室を公開することにし、管理運営の便宜上で、会社とは切り離して「株式会社第一生命ホール」という形態にし、永い間音楽に飢えていた人達のために、主として音楽や、演劇を提供することにした。
ホールは、たちまち洋楽、邦楽のメッカとなった。椅子は幅広く、音響効果も悪くない。６００人という大きさも手ごろで引く手あまたとなった。シュタインウェイなど、一流のピアノを度々買い入れ、そのつど、原智恵子、安川加壽子などによる引き始めのコンサートが開かれた。
さらに、地下４階に剣道場「相悟道場」を開場した。一高東大出身者を中心とする剣道愛好者たちが、毎水曜日の早朝３，４０名集まって稽古、風呂に入って出勤した。多い時には、会員は２００名ほどいて、元最高裁長官、元警視総監などは若いうちから参加していたとのこと。

「ホール」と「道場」は、いずれも社会貢献のための施設として使われ、「ＧＨＱのビル」から「第一生命のビル」の名を取り戻す、有効な手段となった。

しかし、「第一生命館」も時代が変わり、１９９３年（平成５年）に建て替えられ、現在は「ＤＮタワー２１」と名前を変えた。表示では「第一・農中ビル」となっているので、共同ビルとなったようだ。新ビルは、低層、高層の二本を一体化したビルで低層階の側壁は旧第一生命館のものが使われている。旧ビル時代は、農林中金ビルと敷地は一緒でも建物は分離していた。したがって、昭和３３年に、「第一生命」の四文字を側壁に飾るのは問題なかった。しかし、新ビルは共同ビルとなったせいか、側壁の四文字が剥がされた。剥がされた跡は、現在でも残っている。一つ２５０ｋｇもした文字盤、
どうなったか、気になる。

「第一生命館」の前の本社、京橋の「第一相互館」は大正１０年に完成、東洋一のビルとして有名になったがすぐに手狭になり、昭和初期には次の候補地を探し始めた。当時の矢野恒太社長の構想は、延べ坪３千５百坪あった相互館の数倍、少なくとも１万５千坪の規模でなければならないという大規模なもので適当な土地が見つからない。
昭和６年、関東大震災で全壊した警視庁跡の国有地が民間に払い下げられることになりこれに応募、四区画に分けられた土地の三区画を入手した。面積は１６８２坪、払い下げ価格は１８２万円、お濠に面した絶好の場所だった。
しかし、残りの一区画は、すでに農林中金が入手、譲渡交渉を試みたが承諾は得られなかった。そして、それぞれ別々のビルを建てた。

「ＤＮ２１」ビル誕生は、創業者・矢野恒太元社長の構想が、一応実現したといえる。新ビルからＧＨＱが使用していた痕跡は消え、マッカーサー元帥の部屋は、残してある。しかし、残念ながら旧ビル時代と同じ雰囲気は感じられない。
（つづく）

****

事　務　局

****

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
住所：〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１14
ライオンズプラザ町屋７０３
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX：０３－３８１９－７６５１
電話・FAX：０３－３８１９－７６５１